# ふるさと米子 探検隊

## 第19号 皆生温泉 今とむかしの巻

米子市立図書館 編刊／2017.3 TEL0859-22-2612 FAX0859-22-2637 http://www.yonago-toshokan.jp

日野川の河口、弓ヶ浜半島の付け根に位置する皆生温泉。そのむかし、日野川が運ぶ土砂によって地形が変化し、海になったり池になったりする場所だったので、海池（かいけ）と名前が付いたといいます。江戸時代の終わりごろに皆生（みなき）ると書いて、皆生（かいけ）と改名され、温泉が発見されたのは、明治の終わりごろから。その後、大正、昭和の都市開発によって整備され、全国的にも有名な温泉街として知られるようになりました。トライアスロン発祥（はっしょう）の地として、今も毎年夏には、全国からたくさんの選手が集まり熱いレースがくり広げられます。米子がほこる皆生温泉について、その今とむかしを調べてみましょう。



平成 20 年代



昭和 10 年代

## 探検隊の参考資料

図書館にはみんなの探検を助けてくれるたくさんの資料があります。

「皆生今昔」山陰中央新報社／著 皆生温泉街づくり推進協議会 1981 Y224／S6
「皆生温泉散策マップKAIKE WalkingMap」皆生温泉旅館組合 2013 Y290／カイ
「五十年のあゆみ」皆生温泉観光株式会社 1974 Y33／K3
「海に湯が湧く1世紀」皆生温泉開湯100年祭記念事業実行委員会 2001 Y224／K13
「ふるさと福米のあゆみ」ふるさと福米のあゆみ刊行実行委員会 1990 Y224／F4
「ふるさと福生の歩み」福生地区記念誌作成実行委員会／編刊 2011 Y224／フク
「鳥取県の温泉」鳥取県生活環境部編刊 2000 Y45／T4／2
「決定版 米子・境港・西伯・日野ふるさと大百科」2008 郷土出版社編刊 Y220／ケツ
「新修 米子市史 第12巻 資料編 絵図・地図 2004 米子市史編纂協議会編刊 Y224／Y19-2／12
「新修 米子市史 第13巻 資料編 写真 1996 米子市史編纂協議会編刊 Y224／Y19／13
「ふるさと米子の先人に学ぶ郷土資料集 小学校１～４年生用」米子市教育委員会 Y224／フル
「米子のふるさと散歩」米子市山陰歴史館運営委員会 米子錦ライオンズクラブ 2012 Y224／ヨナ
「米子ぶらり歴史散歩」船越元四郎 著 米子ぶらり歴史散歩刊行会 2006 Y224／F 2-2

（資料名の後の数字と記号は「請求記号」です（ラベルの番号）。資料がどこに置いてあるかを示しています。）

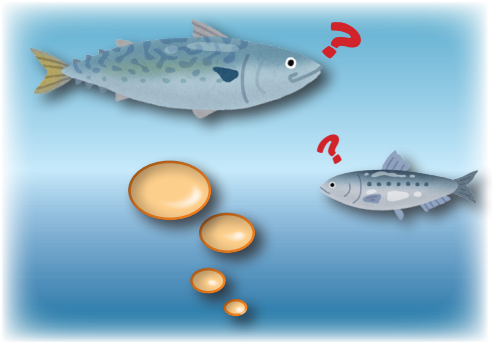
## 漁師、海に「泡の湯」発見

皆生温泉が最初に発見されたのは1870年（明治初年）ごろと言われています。もともと皆生海岸は漁業が盛んで、春になるとイワシやサバが回遊し、漁師たちには絶好の漁場であったといいます。その浜辺から200メートル沖に泡が吹き出ている場所があり、漁師たちはそこを「泡の湯」とよんでいました。最初は魚がたくさん集まって一度に息をするために泡が出ているのだろうと思われていましたが、何度か網をうった結果、魚とは関係のないものとわかりました。そこで泡の湧く位置からさおをおろし、それを伝ってもぐってみると、海の底から熱い温泉が湧き出ているのを発見したのです。

けれどもそこは10メートル～20メートルの海底だったため、利用することもできずにそのままになっていました。



地引網でイワシを取っている漁師たち。（大正時代）



## 皆生温泉誕生



山川忠五郎の記念像
皆生街道沿い

海中の「泡の湯」発見から30年たった、1900（明治33）年９月４日、福生村上福原の漁師、山川忠五郎らが、海岸の浅瀬で湧きだしていた温泉を発見しました。皆生温泉誕生の日です。明治初年の皆生の浜は日野川から運ばれた土砂によって、年々、２～４メートルずつ増えていました。30年の間に砂浜が延びて、温泉の湧きだす地点まで来ていたのでした。温泉の湧きだした位置は、現在は皆生３条通りのつきあたりの海中となっているところです。山川忠五郎の発見によって、当時の村長、伊藤国次郎は、波打ちぎわを掘って、板囲いをして、村営の「村湯」と呼ばれる、温泉小屋を造りました。

その後、1911（明治44）年、福生村皆生の八幡市次郎が、温泉源を本格的に堀り、鉄管を約40メートル入れて温泉を出しエンジンポンプで湯を送り、村湯に供給するとともに、コンクリートの浴そうをつくって営業しました。そして1914（大正３）年、「松風館」と名付けられた民宿に似た温泉場を開業しました。松風館は繁盛しましたが、温泉が利用できるのは夏の間だけで、冬になると温泉の温度が低下し、日本海の荒波で温源の鉄管をおられ苦労しました。八幡家の子孫は旅館「偕楽園」を経営し、元湯として受け継ぎました。

## 有本松太郎による温泉開発と都市計画

八幡市次郎の仕事を引き継いだのが、1921（大正10）年、皆生温泉土地株式会社（今の皆生温泉観光株式会社）の代表取締役・有本松太郎です。有本は本格的な温泉の開発のために、海浜に穴を掘り、深さ39メートル内径約20センチの鉄管を入れる工事を行った結果、温度79度の泡の湯を安定してくみ上げることに成功しました。エンジンポンプで湯を送り、松風館や大山館などの旅館に送られ、温泉客でにぎわうようになりました。

そして、専門家に温泉街の設計図を作ってもらい参考にして、京都などの都市のように、南北に１～４条通り、東西を１～４丁目とした碁盤目上に町区と道路を作り、温泉街の整備を進めました。



有本松太郎胸像

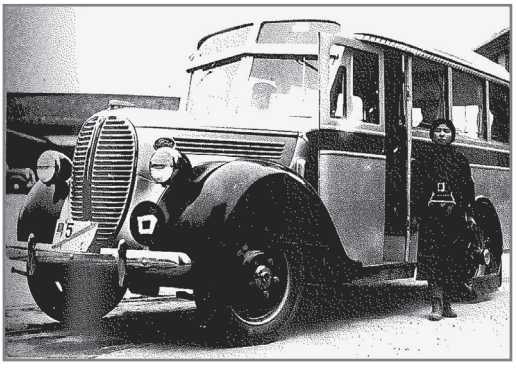
有本松太郎は、兵庫県浜坂町生まれ。明治の末に米子にやってきて、山陰線鉄道の建設工事を行いました。胸像は皆生四条通りつきあたりの海岸に建っています。

## 米子駅から皆生間の道路と電車の開通

さらに有本松太郎は、1923（大正12）年に、米子から皆生温泉を結ぶ路面電車を建設する計画をはじめました。２年後の、1925（大正14）年角盤町（いまの公会堂）と皆生を結ぶ「米子電車軌道」が開通しました。終点は４条通り公園西側まで走りました。所要時間は約20分。料金は当初18銭でした。



チンチン電車（路面電車）



乗合自動車（乗合バス）




運転手が警笛を、また車掌がベルを「チンチン」と鳴らしていたのでチンチン電車といわれています。

市内道路は、皆生温泉土地株式会社が1922（大正11）年、乗合自動車12人乗り３台を導入しました。米子駅より車尾経由で皆生温泉まで約15分。料金大人片道40銭でした。けれども冬になると雪で自動車が動かなくなりました。

電車が1925（大正14）年に開通すると、交通の中心は電車となりました。戦争による軍の命令により1938（昭和13）年に廃止されるまで電車が米子皆生間の交通の中心となりました。

4

# 皆生温泉の今とむかし



4条通り交差点



4条通り　昭和初め頃
皆生電車皆生温泉停留所

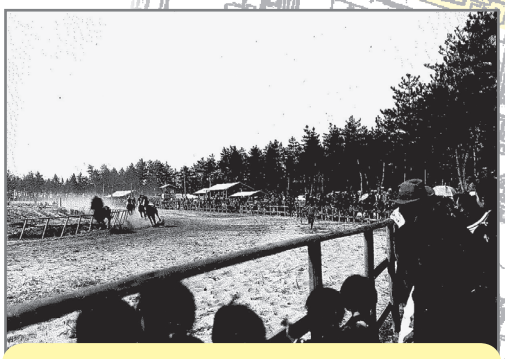


テトラポット
離岸堤（りがんてい）

護岸防潮堤（ごがんぼうちょうてい）



海浜公園



皆生競馬
1929（昭和4）年完成した競馬場。戦争によって中断し戦後1947～48（昭和22～23）年に開催されました。







九条通り

八条通り

皆生街道



福生中学校



「米子境港都市計画計画図」2014（平成26）年米子市役所発行より



3 条通りつきあたり
トライアスロン像



皆生海岸 1942 ～ 43
（昭和 17 ～ 18）年頃

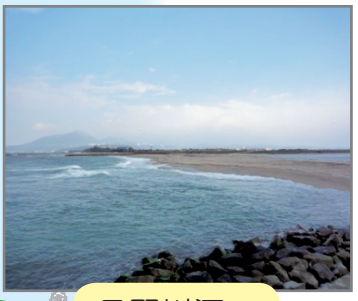


皆生神社



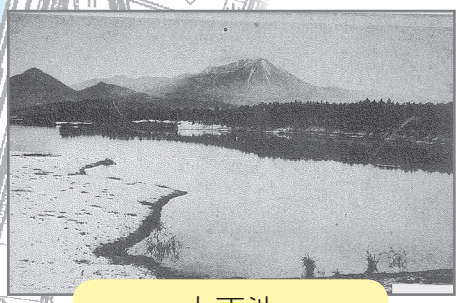
3 条通り
交差点





日野川河口





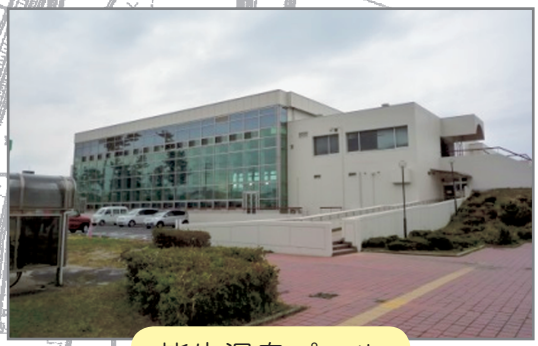
大正池
1918（大正 7）年の
洪水でできた



米子市観光センター



八代荒神社のくちなわさん



皆生温泉プール

皆生侍の墓

皆生車尾線

皆生大橋と国道 431 号

日野川河口

三条通り
二条通り
一条通り
七条通り
六条通り
五条通り
四条通り

## 皆生海岸の砂浜の浸食

明治初年頃、皆生海岸は日野川の流砂によって年々２メートル～４メートルほど砂浜が増していました。これは山間部で行われていた、たたら製鉄で必要な砂鉄の採取のため、日野川上流域の斜面を切りくずし、大量の土砂が流された（かんな流し）ためと言われています。この砂鉄生産は大正中期頃まで続きましたが、砂鉄から鉄鉱石による製鉄生産に代わることにより、たたら製鉄が終わることで、土砂が流されなくなったので、海岸に打ちよせる波によって皆生海岸が浸食されるようになりました。1921（大正10）年に温泉が開発されてから、1945（昭和20）年の終戦ごろまでに約300メートルも海岸線が後退したといわれます。

## 護岸対策、よみがえる皆生の砂浜

皆生海岸の浸食は、日野川の河口から西へ数キロにも及びました。鳥取県は1955（昭和30）年から1959（昭和34）年にかけて東西へ876.65メートルの護岸を造りました。さらに1971（昭和46）年から建設省（現在の国土交通省）が重さ16トンのテトラポットを積み重ねる離岸堤の工事に取りかかり、1978（昭和53）年に海水浴場が復活し、1985（昭和60）年に工事が完成。今のような砂浜になりました。

1959（昭和34）年には、大型娯楽施設・皆生温泉ヘルスランドができ、昭和60年代にかけて、たくさんの旅館が開業。皆生の街はたくさんの観光客や温泉客でにぎわいました。



## トライアスロン発祥の地

皆生トライアスロン（全日本トライアスロン皆生大会）は皆生温泉開設60周年記念事業として皆生温泉の若手経営者が発案しました。

そして1981（昭和56）年、皆生の海や大山山麓の豊かな自然を生かして、日本初のトライアスロン大会として開催されました。

毎年７月に、全国から鉄人たちが参加し、全走行距離190.195kmを炎天下のもと熱い戦いが繰り広げられます。スイム３km、バイク145km、ラン42.195kmという、ハードなレースを競技する選手たちをたくさんのボランティアがサポートします。





## 皆生の海と浜のエコ施設



皆生は下水や温泉排水、雨水を処理する下水道がなかったため、特に温泉排水の処理は悩みの種でした。旅館組合などが市へ下水道建設を申し入れ、やっと1975（昭和50）年末から工事に取りかかりました。皆生温泉の下水道事業は、市の中心部の工事の５年後に工事が始まりました。温泉排水、雨水を処理し、きれいな生活排水と日本海の水質を保つために、処理場では、分流式によって、下水、温泉排水、雨水を別々に処理しています。

下水処理施設から出る水は臭気塔でオゾン脱臭されたうえ、塩素滅菌して約60メートル沖に放流します。汚泥は約８キロ西の内浜処理場に圧送し、濃縮し脱水機で脱水し焼却しています。

## 皆生に関する今とむかしの数をくらべてみよう

皆生温泉の旅館数
　むかし：大正15年…16軒
　　：昭和21年…７軒
　　（太平洋戦争直後）
　　：昭和49年…51軒
　今：平成27年…25軒
　　（ホテルも含みます）

皆生温泉の観光施設入込客数
　むかし：昭和29年　110,032人
　　：昭和49年1,509,000人
　今：平成27年1,298,000人

温泉地入湯客数　むかし：大正14年　100,000人ぐらい
　今：平成27年　407,316人

米子の自動車（乗用車とバス）台数　昭和２年…13台
　昭和28年…143台
　平成22～26年度末…49,363台




1922（大正 11）年にできた大山館



「鳥取県観光戦略課Webサイト」最新の数のデータがわかる
『鳥取県統計書』明治17・24・35・37～40・44年　大正５年　昭和２・３・６～11年　藤本文庫003/Ｉ２　『鳥取県統計書』昭和24～31年　Ｙ35/Ｔ1
『鳥取県統計年鑑』昭和32～現在　Ｙ35/Ｔ1
『米子市勢要覧』昭和３（1928）年～平成４（1992）年　Ｙ31/Ｙ2
『新修米子市史　第11巻　資料編　現代』Ｙ224/Ｙ19/11
『鳥取県百年の統計』Ｙ35/Ｔ2-11

**統計資料**

# 路面電車があったころの米子市内地図

1938（昭和 13）年ごろの地図。この年、福生村（上福原・皆生）と福米村（東福原・西福原・米原）が米子市に合併されました。



境線の上を走る皆生電車

大正 15 年 1 月、角盤町から灘町回りで米子駅まで、昭和 3 年 1 月、市役所前の米子中央線が開通した。

大正 14 年 4 月 1 日。当初は米子町角盤町（いまの公会堂まえ）を起点とし、皆生温泉 4 条通り公園西側まで走った。

## ほかにも調べてみよう！



皆生侍（かいけさむらい）…江戸時代に皆生に新田を開拓した侍たち
八幡新兵衛について
日野川の洪水と皆生…地形の変化や人工の土手　自然の恩恵と人々の知恵や苦労
皆生に伝わる昔話
米子飛行場
防空壕（ぼうくうごう）
皆生の海浜植物たち…ハマボウフウ（セリ科の多年草）、クロマツ（海岸林）
皆生の旅館について
風呂の特徴　温泉の成分…泉質はナトリウム、カルシウム塩化物泉など
冬の味覚松葉ガニ
皆生神社、八代荒神社のくちなわ神事について
明治大正時代の建物
鳥取県ライトハウスについて
皆生漁港について
皆生のマリンスポーツについて







**さあ、探検に出かけよう！**

**川や海に行くときはあぶないので大人といっしょに行こう**